With you

序章

あたしは如月花恋。S 市に住む 23 歳の女性です。医薬品会社に勤めていてお薬の相互作用の調査を担当しています。S 市は 7 年前に大地震があり大きな被害がありましたが、懸命の努力で見事復興しました。お仕事は色々な部署の人と接点があるからとっても気を遣うけど、先輩や同僚に助けられて何とかこなしています。会社は街の中心部にあって郊外から地下鉄で通っています。最寄りの花京院駅まで歩いて 20 分、地下鉄に乗っている時間は 10 分くらいで、そこから会社まではすぐです。通勤は 1 時間弱掛かるもののそれほど負担には感じていないです。ほぼ定時で終わって土日もお休みなので、充実した余暇を過ごせてます。

3 年前から付き合っている人がいて、その人が頼りがいがあって優しいです。あたしがベリーダンスの発表会に出演したとき、観客として見に来てくれて、終わった後に声を掛けてくれたんです。あたしの舞に癒されたって言ってくれて、立ち話を続けていると話が弾んで、もっと彼と話したくなって…あたしは他の出演者との打ち上げを断って彼と二人でお食事に出掛けました。二人ともこの街の名物の牛タンが好きだってことで、牛タン屋へ行ったのです。彼の独特の箸の持ち方は気になったけど、彼の話は今まで私が経験したことがない世界で魅力的でした。彼とあたしは 7 年前の大地震で共に両親を亡くしていたこともあり寂しさも共感できました。それからほどなく彼の告白を受けてお付き合いすることにしたのです。お仕事を終えて 2 人で過ごしていると、愚痴なんかを親身に聞いてくれて、愛されてるな～って思います！付き合い始めてからも特別な日には 2 人で牛タンを食べに行ったりしています。

第 1 章：with you

今日は金曜日、フレックスタイムで 15 時にお仕事を終えて、同期入社の 4 人で女子会に来ています！

女性 1：「花恋～。彼とは上手くやってるの？」

花恋：「うん。毎日楽しいよ。」

女性 2：「私、前に花恋の彼を見たけど、精悍な顔立ちだったよ。」

女性 3：「いいね～。しかも花恋の話いっぱい聞いてくれるんでしょ。羨ましいわ～。」

花恋：「みんなだって彼氏いるでしょ？」

女性 3：「ゲームしてばっかしで全然相手してもらえないよ…何のために付き合ってるんだか…」

女性 1：「あたしは、付き合ってる期間は長いんだけどさ、最近、倦怠期っていうか、マンネリで…将来のことを考えちゃう…花恋の彼は内科医だもんね。将来も明るいわ…」

女性 2：「私の彼はいい人なんだけど、優柔不断なんだよね…花恋の彼はそこそこイケメンで、決断力もあるみたいだし、何より花恋を大事にしてくれる…こんないい彼はいないわよ。」

花恋：「うん…そうなんだけどね…」

そう…ここまでは完璧…でもあたしは 1 つだけ彼に不満がありました。それはエッチがあまり上手じゃないことです。まあ、上手過ぎても中毒になっちゃいそうだし、浮気の心配をしたり、それは

それで不安なんだけど……せめて人並みに満足できるくらいの快感は欲しい💕と思ってしまうのです…そんなことを話すと…

女性1:「うん…そこはわかる…あたしの彼はそこはクリアしてるかな…」

女性2:「私の場合は彼がMだからこちらから攻めてあげればその気になって私に来てくれる…」

女性3:「あたしは花恋と似たような感じだから、さっき言ったこともあって、別れようかと思ってる。」

女性1:「まだ結婚とか意識するのは早いかもだけど、長く付き合うならそこは大事だよ！」

女性2:「花恋が彼を上手くリードして育ててあげるっていうのもありかも？」

花恋:「え～。そんなことしたらあたしが…淫乱な女だと思われちゃうじゃない！」

思わず声が大きくなったあたしを近くの男性客が振り返って見る。

花恋:「女の子慣れしてないからね…ヒロ君。」

しばらく恋愛話で盛り上がっていましたが、それぞれ今夜の予定があるので、女子会を終えました。お店を出て地下鉄に乗り、花京院駅で降りると、ヒロ君にこれから帰ると電話を掛けました。

ヒロ:『そうか。迎えに行くよ。今どこにいる？』

花恋:『花京院駅に着いて、あと15分くらいでお家に着くから大丈夫だよ。』

ヒロ:『いつものコンビニへアイスクリームを買いに出るからそこで会えるかもしれないね。』

花恋:『うん。そこで会えたらいいね。』(ヒロ君、きっとコンビニで待っててくれる💕)

あたしは再び歩き出しました。が…しばらくして急に尿意を催してきて、ついに我慢できなくなりました。

花恋:(飲み過ぎちゃったかな…)

自宅までは間に合いそうもないです。ヒロ君がいるコンビニでおトイレを借りようか…でも最短でもあと5分くらい掛かるし、それに誰か使ってたら待たないとならない…思案しながら辺りを見渡すと公園の中におトイレのマークがある建物が見えました。と、同時にヒロ君が迎えに来てくれました！少し息を乱しています。走ってここまで来てくれたようです。

ヒロ:「少し早くコンビニに着いたからここまで来てみた。」

花恋:「ありがとー、ヒロ君、あのね、あたし、おトイレ行きたくなったから、そこの公園のおトイレでしてくるね。」

ヒロ:「一人で大丈夫か？そばまで一緒に行こうか？」

辺りはまだ明るい。すぐ近くだし、ああいうおトイレって、音が外まで聞こえちゃったりしたら恥ずかしいから…

花恋:「ううん。大丈夫。」

あたしは公園に入り、視界に見えたおトイレに入りました。このときはまだ、これから起こる出来事を想像することすらできなかったのです…

第2章:彼女のエリア

花恋:「ふ～…スッキリした💕」

　あたしはおトイレを済ませると外に出ました。ふと気配を感じてそちらの方向を見ると、人影が見えます…

花恋:「え・・・何あの娘…」

花恋:（浮いてる…何かの撮影じゃないよね…幽霊…こっちを見てる。まずい…早く逃げないと…）

　あたしは幽霊を見ながら後ずさりしました。と幽霊がこちらに気づき見つめています。

幽霊:（あなた…あたしの姿が見えるのね…）

花恋:（頭に直接聞こえてくる？）

幽霊:（あたしの姿を見えるということは、あなたはあたしが入れるってこと…）

花恋:（入る？って？？）

　幽霊が猛烈なスピードで距離を詰めてくる！あたしはとっさに走り出しましたが、ヒロ君のいる方向とは逆に向かっていることに気づきました。

花恋:（まずいわ…これだと追いつかれるのは時間の問題…）

幽霊:（うふ💕）

　突然目の前に幽霊が現れた…瞬間移動？

花恋:（そんな…どうなっちゃうの？あたし…）

幽霊:（大丈夫、危害は加えないよ…ただ…）

ヒロ:「そこまでだ！」

花恋:「ヒロ君！」

ヒロ:「戻ってくるのが遅いから来てみると、花恋が走っていくのが見えたから、追いかけてきた。」

幽霊:（へえ…あなたもあたしが見えるのね…これは思わぬ収穫だわ…）

幽霊は両手を広げると何かをつぶやき始めました。あたりの木々が騒めきます。

ヒロ:「花恋！お前だけでも逃げろ！俺が時間を稼ぐ…」

花恋:「ヒロ君を置いて自分だけ逃げれないよ…」

ヒロ:「このままだと二人ともやられてしまうかもしれない。」

幽霊:（あら、危害は加えないって言っているじゃない…）

ヒロ:「じゃあ、何が望みなんだ！」

幽霊:（そこの花恋って娘のカラダを少し借りるだけよ💕）

ヒロ:「そんなこと、許す訳がないだろう！」

幽霊:（ん～～。許してもらわなくても奪っちゃうことはできるんだけどな…こうして…）

幽霊は高速の動きであたしの前に移動してきた！

ヒロ:「花恋！」

ヒロ君があたしと幽霊の間に入り、あたしを庇ってくれました…

幽霊:（ちょっと…このままだとあたし…）

幽霊はヒロ君のカラダに衝突する…ことなく、ヒロ君のカラダに吸い込まれていきました…あたしは何もできずにその様子を見守っていました。ヒロ君は驚いた表情をしたまま膝をつきうなだれました…そして立ち上がったヒロ君は先ほどまでと全く違った表情をしていたのです…

花恋:「ヒロ君…」

幽霊 in ヒロ:「…入れた…」

花恋:「あなた、ヒロ君のカラダに乗り移ったのね！出て行ってよ！ヒロ君のカラダから！」

幽霊 in ヒロ:「出て行ってもいいけど～…すぐにあなたのカラダに乗り移るわよ。」

あたしは一瞬その言葉に戸惑うが、すぐに言葉を返しました。

花恋:「あなた、何がしたいのよ！」

幽霊 in ヒロ:「ん～…ただ幸せそうな女の子に乗り移ってその人が体験したことや感覚を共有したいだけよ。候補が二人見つかったのは良かったけど、一人は男の子で、そっちの方に入っちゃうなんてね。でもまさか…あたしの意思でカラダを操れるなんて💕 嬉しい誤算だわ。このヒロ君、あたしと相性が良いみたいね。」

幽霊はヒロ君のカラダを使って嬉しそうに話しています。

花恋:「何言ってるのよ！あなたなんかとヒロ君が相性が良い訳ないでしょ！で、結局何がしたいのよ！」

幽霊 in ヒロ:「うるさいわね！あなた、あなたって…あたしには麻耶っていう名前があるんだから…それにいきなりこんな状態になったんだから急に何をしたいか、って言われてもわからないわよ！」

優しかったヒロ君があたしに向かって怒り苛立っています。あたしは哀しくなります…

花恋:「じゃあ、別に乗り移らなくてもいいんじゃ…」

麻耶 in ヒロ:「まあ、一生、このヒロ君に乗り移っている訳じゃないからしばらく借りるわね。あ、たまにはあたしが抜けてカラダを返してあげるから。」

花恋:（取り敢えず身の危険がある状況ではないみたいだし、下手に麻耶を刺激するのも良くなさそうだから、ヒロ君にはしばらく我慢してもらって、麻耶がカラダから出たときにヒロ君に相談ね。）

花恋:「わかったわ…絶対に私とヒロ君に危害を加えないでね！あとなるべくあたしと一緒にいて！」

麻耶 in ヒロ:「ええ、約束するわ。来たみたいね…うジャ！その娘に入ってみて！」

花恋:（え？誰に言ってるの？他に人なんていなかったんだけど…）

その瞬間、あたしの意識は徐々に薄れていきました。

花恋:（何？…何が起きたの？麻耶があたしに入って…きているの…？？）

第 3 章【回想パート】:いつか時が流れて…

あたしは麻耶。みんなが想像している幽霊だ。いつから幽霊になったかはわからない。気づいたらあたしはここにいた。幽霊になって気づいたことがある。幽霊は生きていたころの大事なものには執着がなくなる。お金、容姿、健康、そして時間さえも関係なくなる。それらを手に入れることはできないし、手に入れることに意味をなさないとも言える。幽霊は人間のように寿命はない。ただ消滅することはあり、満足したときと絶望したときだ。

それから幽霊は他にもいるということだ。幽霊どうしはお互いにコミュニケーションができるし、あたしはそれを楽しんでいる。他の幽霊が消滅していく中、あたしが長くこの世に留まっていられるのは、たくさんの人(霊)とコミュニケーションを楽しんでいるからかもしれない。

そしてもう一つ。幽霊は波長が合う肉体に入ることができる。だいたいは感覚の共有だけで、漫画やドラマにあるようにその人の意に反する行動をしたという話は幽 TUBE でも聞いたことがない。稀に短時間だけ乗っ取ったり、その人に影響を与えたりするが、やはりその人の人生を大きく変えるような話も聞いたことがない。幽霊が邪悪な存在というのは生きている人たちの妄想なのだ。あたしも女の子の肉体に入り、感覚を共有したことはある。

そんなとき、あたしはうジャと出会った。うジャは男の子だったが、あたしと波長が合う気がしていて、おしゃべりしていて楽しい。あたしたちは、時間を気にせず、幽霊になってから経験した出来事、それまで感覚を共有した人のお話なんかで盛り上がった。ちなみに波長が合えば、何度でもその肉体に出入りできるフリーパス状態となるが、いつまでも波長が合う訳ではなく、いつかその人の波長が変わり乗り移れなくなる。もちろん祝福すべきイベントによるものもあるが、それと同じくらい悲しく切ない状況により変わってしまう場合もある…あたしたちはそんな人たちを何度か見て、経験してきた…

あたしとうジャはそれぞれ同じ波長を発する肉体を見つけ、乗り移ってはその人の体験を共有

し、肉体から出た際にお互いに共有した。乗り移っている状態では、自分を表現できないので、生きている人はもちろん幽霊にもコンタクトを取ることができなかった。あたしにとって男の子の経験は興味深く、うジャにとっての女の子も同じ感覚だった。あたしはうジャを好きになっているのかもしれない。うジャもあたしのことを嫌いではないはずだ。そんなに楽しそうな表情でおしゃべりを楽しんでいるのに、それが嘘や演技だとしたら、あたしは絶望して消滅してしまうだろう…でももしそうだとして、うジャもあたしと同じ気持ちだったとして、恋人になれたとして、肉体を持てないあたしたちは何ができるんだろう…

第 4 章:2 人の絆

麻耶 in ヒロ:「うまく入れた？」

うジャ in 花恋:「カラダの主導権はもらったけど、まだ花恋さんの意識はあるみたいだよ。」

麻耶 in ヒロ:「いきなり女性のカラダを操れるなんて上出来だわ。意識があるならその方都合が良いからそのままの状態を維持してね。」

うジャ in 花恋:「うん。胸の重さが違和感あるけど麻耶から聞いていた通り柔らかい感覚と優しい気持ちに包まれているよ。でも麻耶はこっちのカラダの方が良かったんじゃないの？」

麻耶 in ヒロ:「最初はそう思ってそうするつもりだったけど、こっちの方が相性がいいみたいだから、このままにするわ。うジャはこっちの方が良いの？」

うジャ in 花恋:「いや、俺もこっちの方が相性良さそうだ。いきなり主導権を取れるなんて男に乗り移ったときもなかったよ。」

麻耶 in ヒロ:「じゃあ、このままにしましょ。この二人は恋人同士だし、二人でいることは自然だわ。中身は男女逆転しちゃってるけどね。まずは花恋の部屋に行きましょうか。」

うジャ in 花恋:「花恋さん、聞こえた？今から君の部屋に行くので、場所を教えてくれないかな？」

花恋:（麻耶の他にまさかもう一人いたなんてね…あなた…男性でしょ？）

うジャ in 花恋:「そうだよ。」

花恋:（どうして女の子のカラダを奪うのよ！）

うジャ in 花恋:「それは麻耶と同じ理由だよ。憑依は相手との相性が良くないとできないんだ。」

花恋:（あたしと見ず知らずのあなたの相性が良いって言うの！腹立つ😡）

うジャ in 花恋:「まあ、こんなところで長話をして花恋さんが風邪をひいちゃってもかわいそうだから…案内してよ！花恋さんのお部屋。そこで続きを話すからさ。」

あたしは渋々2 人を部屋に案内した。部屋に戻ると、うジャ in 花恋は上に来ていた服を脱いでシャツ姿になった。

麻耶 in ヒロ:「お腹空いちゃった。久し振りの食事～。うジャ、お料理できるんだっけ？」

うジャ in 花恋:「いや…したことがない…」

麻耶 in ヒロ:「しょうがないな～…じゃあ、お姉さんが作ってあげる💕」

麻耶 in ヒロはエプロン姿に着替え、仕込みを始めた。

花恋:（あの～…あたしも料理できるんですけど…）

うジャ in 花恋:（麻耶があんなにはりきっちゃってるから、花恋さんはまたの機会にってことで…）

花恋:（…仕方ないわね…そう言えばヒロ君が料理したことないかも…これは貴重な映像だわ。）

うジャ in 花恋:「麻耶、俺、何か手伝うことある？」

麻耶 in ヒロ:「大丈夫だよ。あ…うジャ…その恰好だとカラダが冷えちゃうからこれを羽織っていて💕」

麻耶 in ヒロはハンガーに掛けてあった上着をうジャ in 花恋に羽織らせた。

うジャ in 花恋:「ありがとう、麻耶。」

花恋:（…優しいじゃない…）

うジャ in 花恋:（麻耶は結構気遣いできるんですよ。惚れちゃいました？）

花恋:（バカ！ヒロ君のカラダでも中身は女の子なのよ！あたしはそんな気はありません！！）

うジャ in 花恋:（女の子同士でも別にいいと思うけどな…）

料理開始から 30 分後、提供された料理は驚くほど豪華なものだった。

花恋:（え？何？この見たことない多彩なメニュー…ってかこれ作れる材料あったっけ？？）

うジャ in 花恋:（まあ、細かいツッコミはなしにして…）

麻耶 in ヒロ:「さあ、召し上がれ～💕」

うジャ in 花恋:「いただきま～す！」

麻耶 in ヒロ:「たくさん食べてね💕」

目の色を変えて食事にがっつくうジャ in 花恋…

花恋:（…あの…あたしのカラダなので、たくさんは食べないで。美味しそうだけど…）

しばらくパクパクと食べていたうジャ in 花恋だったが…

うジャ in 花恋:「あ、そうだ。花恋さんも食べてみてよ。俺、抜けるから…」

うジャはあたしの肉体から抜け出て、あたしは肉体の主導権を取り戻しました。

花恋:「…憑依から解放されたみたいね。言いたいことは山ほどあるけど、せっかくだからいただくわ…残すのももったいないしね…」

あたしは目の前にあった豪華な料理をほどほど食べた。

花恋:(あたしは何とか解放されたけど、ヒロ君の方からは全然抜け出る気配がないわね…あの女😡)

第5章:笑顔咲く君と繋がってたい…

麻耶 in ヒロ:「どうしたの？そんなにあたしの方を見つめて…！まさか…おなか一杯になって満足したからエッチを…？…初めてだから…優しくしてね💕」

ヒロ君が目をうるうるしながら胸の前で手を組んでカラダをくねらせる…

花恋:「あのね…そんな気分の訳ないでしょ…」

麻耶 in ヒロ:「あら？でもあたしは女の子の気持ち良いところは全部知っているのよ💕ヒロ君以上にあなたを気持ち良くできるか、も…」

あたしは麻耶の言葉にドキッとして箸を止めました。

麻耶 in ヒロ:「興味あるでしょ？今まで感じたことのない快感💕」

花恋:「でもあたしは…ヒロ君の容姿だけじゃなく、中身も好きだから…こんな状態であたしだけ気持ち良くなることはできない…」

麻耶 in ヒロ:「じゃあ、こういうのはどう？」

…

あたしは今ヒロ君とベッドにいます。あたしが何故受け入れたかと言うと、麻耶が提案した条件を了承したからです。その条件とは、「麻耶がヒロ君のカラダを堪能したらヒロ君から出て行くこと。そして行為中はうジャもあたしのカラダから出ていくこと。」

麻耶 in ヒロ:「ほーら、花恋、ここがいいでしょ💕」

ヒロ君の優しい愛撫に激しさが伴ってあたしのあそこを刺激します。あたしのあそこはその刺激に抗うことができず、ひくひくと痙攣しています。

花恋:「どうして…あたしのスポットがわかるの？？」

麻耶:（だってあたし女の子だもん！）

花恋:「あ…んん…いい…ヒロ…君…届いてる…奥まで…」

麻耶 in ヒロ:「可愛いね、花恋💕」

ヒロ君に乗り移っているのは女…ヒロ君じゃない…でもあたしはその甘い声とテクニックに抗うことができず、あそこがきゅっと閉まり軽く逝ってしまいました。それを見ていたヒロ君のおちん〇んも硬く直立しました。

麻耶 in ヒロ:「大丈夫？花恋？」

花恋:「うん…ふわふわして気持ちいい💕」

あたしも麻耶の肉棒に触れ、優しくキスをします。

麻耶 in ヒロ:「ありがとう、花恋。もっと気持ち良くさせてあげるからね💕」

麻耶のおちん〇んがあたしの中に入ってきます。もともと女だってこともあってあたしの膣内を的確に刺激していきます。

花恋:「だめ…でも…ああ…あ…」

麻耶 in ヒロ:「逝きそうね。フィニッシュよ💕」

麻耶は激しくあたしのナカを掻き回します。あたしは声にならない声をあげその場に果てました…

…

花恋:「は…ああん💕…」

すぐに気づくきましたが、あたしは自分のカラダから抜け出て幽体となっているようです…ヒロ君な麻耶はあたしを逝かせたからか、そのおちん〇んは急に勢いを失いしなだれてしまいました…

麻耶 in ヒロ:「あれ？まだあたしこのカラダに慣れていないのかな…」
花恋:「どうしよう…このままだと麻耶がヒロ君のカラダから出ていかないことに…」
うジャ:（しょうがないな…カラダを借りるよ！花恋さん。麻耶はまだ男の子初心者だからね。俺が麻耶を気持ち良くさせてあげるよ！）
　不意に公園でのあのぞくっとした感覚にあたしは襲われます。
花恋:（しまった…油断したわ…）
うジャ in 花恋:「乗り移り成功！麻耶から聞いた通り、女の子は好きな男とのエッチで満足しちゃったら、カラダから魂が抜け出ちゃうことがあるって。」

　うジャがあたしのカラダに乗り移りました。その顔は邪気に満ちています。
花恋:（ちょっと、なに乗り移ってるのよ！！）
　そしてあたしになったうジャはエッチな表情をして、積極的に麻耶のおちん〇んを手に取ると、おしりの方に向かって手を這わせしました。
花恋:（やだ…あたしがあんなエッチなことを…）
麻耶 in ヒロ:「何…これ…こんなところが気持ちいいなんて…」
うジャ in 花恋:「麻耶、感じちゃってる？おちん〇んからお汁が出ちゃってるよ。」
　ヒロ君のおちん〇んは再び勢いを取り戻しました。
麻耶 in ヒロ:「ああん…ありがとう、うジャ、復活してきたわ。」
うジャ in 花恋:「ははっ！俺の手に掛かればち〇ぽもこうなる！」
花恋:（なんてセリフをあたしに言わせてるのよ😡）